

〈国語〉

生徒の「書きたい」を社会生活へ生かせる書く力の育成 — 生徒のキャリア形成と関連づけた学習課題の工夫を通して（第2学年） —

与那原町立与那原中学校教諭 山内 康 宏

I テーマ設定の理由

平成29年3月に告示された新学習指導要領では、中学校国語各学年の目標（1）において「社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける」とある。このことは、国語の授業で育成する力が、子どもたちの社会生活に結びついていることを求めているといえる。

高校入試の志願書作成や、自己の企画を伝える企画書など、子どもたちが歩んでいく社会生活において、書くことで考えを表現したり相手に伝えたりすることは重要である。そのため、国語の授業における書く力の育成は必須であると考ええる。しかし、多くの生徒は書くことに対して抵抗感や苦手意識を持っている。

私はこれまで「書くこと」の授業において、子ども達の目的意識や相手意識を重視し、日常的な言語生活に密接につながる授業の工夫を行ってきた。その結果、生徒に「書きたい」という思いが芽生え、書くことに対する抵抗感や苦手意識を軽減させることができた。しかし、生徒の「書きたい」という学習意欲の高まりが、書く力の育成につながるかということには疑問が残る。

平成29年度全国学力学習状況調査では、沖縄県は「書く能力」を問う設問全てで、全国の平均正答率を下回り、書く力に課題があることが顕著となった。

その課題克服の手立てとなるのが、中央教育審議会答申（2016年12月21日）で示された授業改善の視点「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連づけながら取り組む」である。これまでの「書くこと」の指導は、子ども達の「書きたい」という意欲を引き出せていたが、学習者の日常的な言語生活や社会生活、つまり「自己のキャリア形成」と関連づける視点が不十分であったのではないかと考えた。子ども達は国語の授業で身につけた書く力を授業の中でしか使わないため、社会生活へ生かせる書く力の向上につながらなかったのではないかと考える。

そこで、本研究では「書くこと」の授業において、生徒のキャリア形成と関連づけた学習課題を設定し、学習していることを社会生活でどう生かすか子ども達に意識させることを重要視する。子ども達の「書きたい」という学習意欲を喚起させるこれまでの実践を生かし、授業の中で身につけた書く力を、日常的な言語生活や社会生活の中でどのように生かすかを体現させることで、社会生活へ生かせる書く力の育成が図られると考えた。

その際、小森茂が提唱する5つの言語意識「相手意識・目的意識・条件意識・方法意識・評価意識」を活用し、子ども達の伝えたい内容や、伝えたい相手をより明確にしたい。また、平野彥が行った作文指導における学習課題の設定方法や授業実践も参考にする。平野の作文指導には、書くことを社会生活へどう生かせるかを子ども達が意識し、体現できる様々な工夫があった。

生徒のキャリア形成と関連づけた学習課題を設定した授業を行ううえで、これらの研究や授業実践を活用し、「書くこと」を社会生活でどう生かせるかを子ども達が意識し、体現できるようにしていきたい。

〈研究仮説〉

「書くこと」の学習指導において、キャリア形成と関連づけた学習課題を設定することで、社会生活での生かし方を意識、体現でき、社会生活へ生かせる書く力を育成できるであろう。

Ⅱ 研究内容

1 生徒の「書きたい」を社会生活へ生かせる書く力とは

新学習指導要領の基本的理念を、藤田晃之（2017）は「子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する『社会に開かれた教育課程』を重視」するとしている。この基本的な理念を受け、中学国語科の目標においても「社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付ける」ことが掲げられた。この改訂に関して成田信子（2017）は「『社会生活』という文言が入ることで『生活に必要な国語』が求められている」と述べ「生きて働く力を志向している」とした。

成田のいう「生活に必要な国語」「生きて働く力」が社会生活へ生かせる書く力に相当すると考える。授業の中で身に付けた書く力を、日常生活や社会生活に生徒が生かしていくことであり、授業の中でそのような意識や態度を育成することも必要である。

成田はこれまでの授業について「学校は学校外で起こっている変化に対応できていない部分があった。質の高い教育実践を目指しながらも、学校内にのみ通用するような言葉の使い方で授業が構成されていた」と課題を示した。この課題からも伺えるように、子ども達の資質・能力を社会生活でどのように生かせるか、授業と社会生活とのつながりをどう意識させるか、という「キャリア教育の視点」が不十分であったように感じる。

下田好行（2008）は「今行っている学習が社会生活にどのようにつながり、自分に対してどのように影響してくるのが理解されてはじめて、学ぶことの意味を把握できる。子どもが今行っている学習の意味を把握すれば、子どもの学習意欲は必然と高まる」と述べている。授業での学習内容を社会生活でどう生かせるかを、子ども達が意識したり必要性を感じたり、また体現することで、子ども達の「書きたい」意欲は必然と生まれ、高まっていくと考えることができる。

そこで本研究では、目指す生徒の姿を「社会生活を意識しながら「書きたい」という意欲をもって学習課題に取り組み、身に付けた書く力を社会生活へ生かそうとする生徒」と定めた。

2 社会生活に生かせる書く力を育成する工夫

(1) キャリア形成と関連づけた学習課題の工夫

成田は、「授業は三要素が双方向に機能して作りあげられる（図1）」とし、「現在の授業実践は、学習課題と資質・能力の双方向の機能を見る視点に課題がある（図1の黒い矢印）」と指摘している。下田もまた、「学習課題が生徒を取り巻く社会生活とのつながりのなかで作られることが必要であり、社会生活に落とし込まれたかたちで作成されないと生きて働く知識・技能、活用する力とならない」としている。これらのことから、学習課題に工夫が必要なのは明らかであると考ええる。

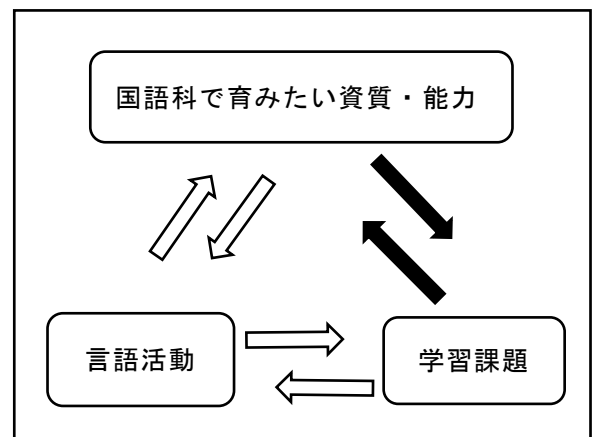


図1 授業づくりを支える三要素(参考)

では、どのような学習課題が有効なのだろうか。下田は知識・技能を活用する力の育成について、「授業自体を日常現実社会そのものにし、活用を生徒に実感させる必要がある」とし、そのような授業を「授業のリアルな環境構成」と呼んでいる。つまり、国語科で育みたい資質・能力と生徒のキャリア形成を関連付けた学習課題が必要だと考えることができる。

さらに下田は、「人は思考・判断したことを他者に向かって表現することで生きて働く知識・技能を自分自身のものにしていく」としている。子ども達が、キャリア形成に関連した学習課題に取り組み、思考・判断したことを他者に表現する展開を授業の中に組みこむことが、社会生活へ生かせる書く力の育成に有効だと考えられよう。

(2) 社会生活へ生かすことを意識させる授業の工夫

① 授業のリアルな環境構成

キャリア形成と関連づけた学習課題を設定したのち、学習していることを社会生活に生かすことを子ども達に意識させながら取り組ませることが重要となる。下田は「授業のリアルな環境構成」について「学校の授業は現実社会から遊離した特殊な空間になってしまいがちである。授業をできるだけ日常現実社会と同じような空間に環境構成する必要がある」と述べ、その手立てを下のように示した。

ア 自分が思考（内面）したことを外に向かって表現する

イ 第三者がその表現を受け取る

ウ 第三者から子供にフィードバックされる

上記の3つの課程は、「現実社会では普通に行われていることであり、この過程を授業の中で取り入れることが、授業を現実社会に環境構成する手立て」としている。さらに、「子どもへのフィードバックが教室の外の人の評価（社会的評価）であればなお良い」としている。社会生活へ生かすことを意識、体現させる授業展開を図2に示した。下田の手立てに加え、学習課題をキャリア形成に関連付けることで、授業はより社会生活に近づく、子ども達は学習していることを社会生活でどう生かすかを意識し、生かし方をリアルに体現できると考えられる。

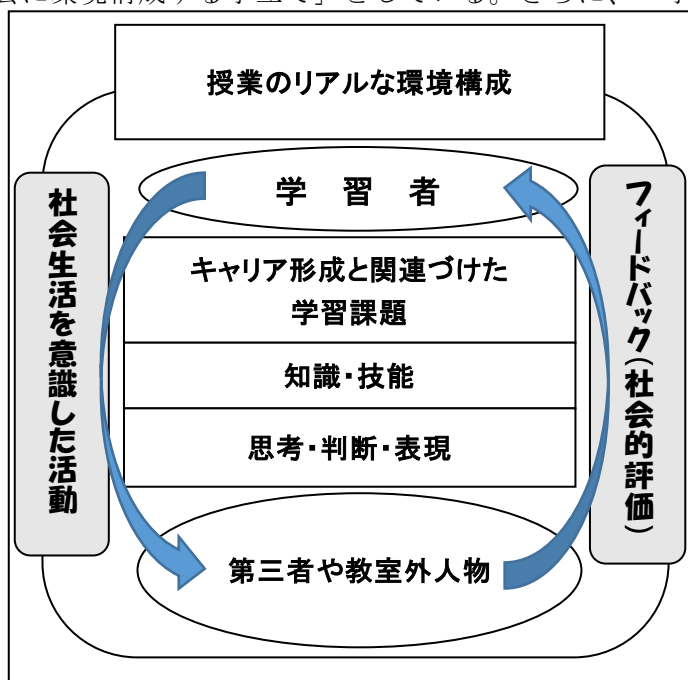


図2 社会生活へ生かすことを意識、体現させる授業展開

② 平野彥が行った「書くこと」の授業の工夫

平野彥は、作文指導に力を注いだ教員である。田中宏幸（2012）は平野の実践の良さを「題材の発掘や学習課題設定の工夫が、子どもたちを『書くこと』に夢中にさせる」と述べている。その例として「国内旅行記」が挙げられる。田中はこの実践に関し「学習課題は想像作文だが、ただの絵空事に陥らぬよう確かな調査に基づいてイメージを広げるよう留意している」とし、3つの工夫を示した。

ア 旅行先の方言を調べて表にまとめる

イ 各地の産業や歴史について参考書を調べる

ウ 旅館などで出会った人と会話する

こうした平野の工夫は、授業を現実社会に近づけるための工夫ととらえることができる。

子ども達の視点にたったとき、学習課題や授業環境が仮想の社会生活の範囲に留まっては、書くことを社会生活へ生かす意識や態度の育成も十分ではないと考えた。小森茂（1999）も、資質・能力の育成について「子供の側から、より具体的、より生活的、より実用的に展開させること」が重要だとした。子ども達が現実社会をリアルに体現できる授業づくりは、書くことが社会生活につながり、子ども達の生きて働く書く力の育成に有効であると考えられる。

(3) 5つの言語意識を取り入れる工夫

小森は「生きて働く国語の力を育成するためには、子供たちの言語生活を視野に入れた国語科授業を構想することである。子供たちが授業で学習したことを、生きた目的や相手、生きた場面や状況等で活用することを意図的に取り入れること」と述べた。さらに、授業で身につけ

た「書く力」を社会生活へ生かしたり活用したりできるようになるためには、「子供たちが5つの言語意識（表1）をしっかりと働かせることが大切である」としている。

表1 5つの言語意識

①	目的（や意図）意識
②	相手意識
③	場面（や状況）意識
④	方法意識（①～③に相応しい態度や表現法を含めた）
⑤	評価意識（①～④を受けて、自分の表現行為が相手にどのように伝わっているか自己調整する）

教師が5つの言語意識を子ども達に提示し、授業展開を行うことは、授業で身につけた「書く力」を社会生活へ生かせること意識させ、体現できる有効な方法であると考えられる。

Ⅲ 指導の実際

1 単元名 私は町長！「与那原町、よりよい町づくり計画」を書こう

教材名 新聞の投書記事を書く（教育出版「伝え合う言葉 中学国語2」）

2 単元目標

- ・社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し、伝えたいことを明確にすること。（新学習指導要領 B 書くことア）
- ・社会生活で活用することを意識し、伝えたいことが分かりやすく伝わるように、文章の構成や展開を工夫すること。（新学習指導要領 B 書くことイ）

3 単元の評価規準（【 】は指導計画での表記方法）

知識及び技能	〔思考力、判断力、表現力等〕 B 書くこと	学びに向かう態度
(1) オ 相手に分かりやすく伝わる構成や展開について理解を深めている。【知①】 (2) ア 意見と根拠の関係について理解している。【知②】	ア 社会生活の中から課題を決め、体験などから材料を集め自分の意見をまとめている。【書①】 イ 相手を意識し、文章の構成や表現を工夫している。【書②】	・自分達の地域に関心を持ち、よりよい社会づくりを考えようとしている。【学①】 ・学んだことを社会生活に生かそうとしている。【学②】

4 単元の指導計画と評価計画（全5時間）

時	学習目標	学習活動	評価規準【評価材料】	授業のリアルな環境構成	環境構成の手立て
1	マッピングを使い与那原町の課題を見つけ、自分の意見をもとう。	①教科書で学習内容と流れを確認する。 ②マッピングを行い与那原町の課題や自分の意見をもつ。 ③マッピングを交流する。	書①、学① マッピングを行い、社会生活を意識した課題を見つけ、自分の意見を書いている。【マッピング】	町長としてみんなに考え	○5つの言語意識の提示。 ①与那原町をよりよい町にする ②保護者や役場の方に ③町長として訴える ④原稿を読んで発表 ⑤保護者や役場の方、友達との交流 ○与那原町の議事録資料。 (実物資料で社会生活を意識させる) ○役場の方が参観することを伝え相手意識を具体的にします。 ※毎時間交流する場面をもち、第3者からのフィードバックを受ける。
2	課題解決の方法を考えよう。	①根拠となる情報を様々な方法で集める。 ②課題解決の方法を考える。	書①、学① 意見の根拠を様々な方法で集め考察している。 【ワークシート】		○インターネットやアンケート調査等を取り入れる。 ※確かな調査で、根拠が空想に陥らないようにする
3	文章構成や表現を工夫して町づくりの構成を考えよう。	①教科書で構成表を確認し構成表を作る。 ②構成メモを交流する。	知①②、書② 意見と根拠の関係を理解し、相手を意識した構成メモになっている。 【構成メモ】		○教科書のモデル文を参考にさせる。 ○意見を伝える相手や場、自分の立場を再度確認し、意見や根拠を選判断基準にし、授業と社会生活のつながりを意識させる。

4	「与那原町、よりよい町づくり計画」を書ける。	①意見が効果的に伝わるよう構成や表現を工夫して書く。	学①② 相手を意識し意見が効果的に伝わるよう文章を書こうとしている。 【授業観察】 知① 構成・意見と根拠の関係を理解し、効果的に伝わるよう意識している。 【生徒作品】	を伝える	○議会では時間が決まっていることを伝え、時数を制限する。 ○補足資料（グラフや図等）の添付も認める。（議会をイメージさせ、社会生活とのつながりを意識させる）
5 （本時）	町長として「与那原町、よりよい町づくり計画」を発表できる。	①文章を読みあい意見を交流する。 ②町づくり課の方のお話を聞く。	書②学② 交流を通してよりよい構成や表現について考えを深めている。【作品】		○保護者や役場の方にも参観していただき、文章や発表を聞いての意見を述べたり、感想を書いたりしてもらう。（教室外の人物のフィードバック）

5 本時の学習指導（第5時）

- (1) 目標 「与那原町、よりよい町づくり計画」を発表できる
- (2) 本時の評価規準

評価の観点	新学習指導要領〔思考力、判断力、表現力〕B 書くこと イ 新学習指導要領〔学びに向かう態度〕②
評価規準	構成や、意見と根拠の関係を理解し、効果的に伝わるよう工夫している。 社会生活や相手を具体的にイメージし、学んだことを活用しようとしている。
評価方法	ワークシート・授業観察

(3) 展開

過程	学習活動・形態	言語活動に関する指導上の留意点	【具体的な評価規準】 （評価方法）
導入	1, 本時の目標と学習の流れを確認する。	○本時の目標や学習活動の流れを確認し、見通しを持たせる。	
展開	与那原町長や与那原町民として「よりよい町づくり計画」を読みあおう 2, 発表会の流れを確認し、文章を読みあう。 ①グループで文章を読みあい感想やアドバイスを書く。 ※役場の方や保護者もグループに入り感想を書いてもらう。 ②グループの代表を1名選び発表する。 3, 町づくり課の方から、与那原町の現在の計画を聞く。 ※時間があれば質疑も受ける	○交流の視点を提示し「納得バロメーター」として視覚化する。  役場の方も交えた読みあいの様子  役場の方の説明	【書くこと イ】 ○相手や発表場面を明確にし、発表したり推敲したりしている。 （ワークシート） 【学びに向かう態度②】 ○学んだことや身に付いた力を確認でき、今後どのように生かすかをイメージできている。 （振り返りシート）
終末	4, 単元をふりかえり学んだことや身に付いた力を確認する。	○振り返りシートに記入させる。	

6 仮説の検証

本研究では、目指す生徒の姿を「社会生活を意識しながら『書きたい』という意欲をもって学習課題に取り組み、身に付けた書く力を社会生活へ生かそうとする生徒」ととらえた。そこで、研究仮説に基づき「キャリア形成と関連づけた学習課題の設定」や「社会生活への生かし方を意

識させる授業の工夫」が有効であったか、授業観察やワークシートの記述、検証授業前後のアンケート調査の分析を基に検証を行っていく。

(1) キャリア形成と関連づけた学習課題の有効性について

本単元の指導項目は「社会生活の中から題材を決め、多様な方法で集めた材料を整理し伝えたいことを明確にする。」（新学習指導要領 B書くことア）「相手に分かりやすく伝えるように文章の構成や表現を工夫すること。」（新学習指導要領 B書くことイ）の2つを重点にしている。キャリア形成と関連づけた学習課題にするため、単元名を「私は町長。与那原町、よりよい町づくり計画を書こう」とした。自分たちが住んでいる町の課題を見つけ、よりよくするためにどのような方法があるか考え、町長という立場で読み手に伝える文を書く学習課題である。「町長」という立場設定と「与那原町、よりよい町づくり計画を書く」という学習課題の設定で、社会生活を意識できるようにし、「書くこと」の生かし方を生徒が体現できるようにした。また、この単元でどのような国語の力をも身につけるのか、生徒が意識できるよう、教科書を使い、毎時間単元目標を確認した。

第1時は、与那原町の課題を見つけ、自分の意見をもつことが目標である。その手立てとしてマッピングを行った（図3）。完成したマッピングはグループで交流し、感想やアドバイスを書き込ませ、第3者のフィードバックを受けとれるようにした。図3の丸で囲った部分は「ごみ拾いなどのボランティアも行った方が良い」とある。このアドバイスをうけ、生徒は自分の考えをさらに深めることができていた。第3者からのフィードバックを受けることで、生徒の考えがより深くなっていると感じた。

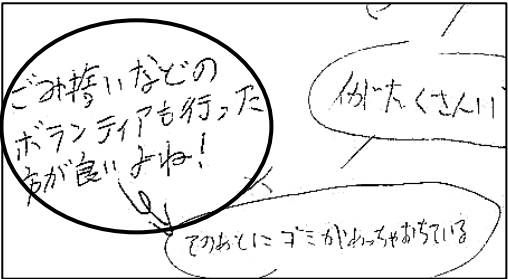


図3 マッピングの記述

「よりよい町づくり計画」の考えを持たせる際は、町長という立場を具体的に意識させるため、次の2つに気をつけさせた。

○町長として、考えが一人よがりにならず、与那原町民のためになっていること

○町長として、与那原町をよりよい町にできる考えであること

生徒の意見が社会生活を意識できているか分析を行ったところ、93%の生徒が社会生活を意識した意見になっていた（表2）。キャリア形成と関連した学習課題の設定により、生徒が社会生活を意識できていたことが伺えた（表3）。意識できていなかった意見に、「海への飛び込みを許可する町づくり」や「サッカー場を建設する」という私的な見解に立った意見があり、町長という立場を意識させることが弱かったためと考えられる。キャリア形成と関連づけた学習課題を継続的行っていくことで改善できると考える。

表2 生徒の意見の分析 (N=117)

社会生活を意識した意見	93%	社会生活を意識できていない意見	7%
-------------	-----	-----------------	----

表3 社会生活を意識した生徒の意見

- ・ 与那原町には伝統的な行事があるのに、それを受け継ぐ人材や後継ぎが少なくなるのが目に見えている。与那原の伝統文化を何世代もの後世に残せる与那原町にする。
- ・ 大型MICEができるので、人口増加により子どもが増える。今のままでは保育園が少なく待機児童が増えると思うので待機児童に困らない与那原町にする。

表4 「授業のリアルな環境構成」のための手立て

- ・ 自分が思考（内面）したことを外に向かって表現する。
- ・ 第三者がその表現を受け取る。
- ・ 第三者から子供にフィードバックされる。

(2) 社会生活を意識させる授業の工夫について

① 授業のリアルな環境構成の検証

下田が提唱した「授業のリアルな環境構成」の手立て（表4）を5時間中3時間の授業で取り入れた。自分の思考を書いたワークシートを、第3者（グループの友達）が読み、感想やアドバイスを書いて本人にフィードバックする形をとった。第1時のマッピングの交

流、第3時の構成表の交流、第5時の「よりよい町づくり計画」を読みあう交流がそれである。

第3時は、第2時で集めた文章の材料を、構成や論の展開を考えながら構成表に書き込んでいく。完成した構成表はグループで読みあい、付箋紙にアドバイスや感想を書きフィードバックさせた。図4の付箋紙には「僕もゴミについて書いたけど、こういう考え方は出なかったの参考になりました。」とあり、交流したことで新たな視点を得ることができ、思考が深まっていると捉えられる。

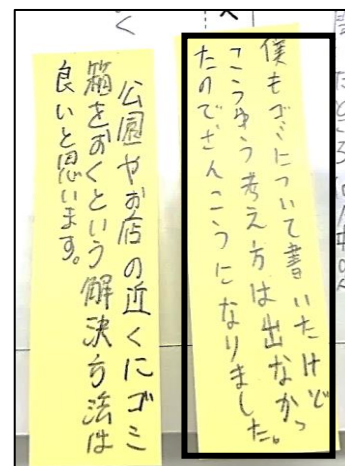


図4 構成表の付箋紙

第3者（生徒）のコメント自体も社会生活を意識できていた。「与那原町には楽しいイベントがたくさんあることを町民に知らせるため、ホームページを作成する」という意見に対して、「学校などで手紙をくばった方がいいのではないかな」「ホームページを見てない人がいるかもしれない」と、社会生活の実態を意識したコメントがあった。この2つの意見を受けた生徒も「チラシを学校に配布し大型スーパー等の掲示板にも貼る。SNSなど、皆がやっているようなことから始め、チラシやホームページにはQRコードをのせる。」と、社会生活をより意識した考えへ深めることができていた。

表5 第3時の振り返りの記述

・ 友達の構成表を読み、良い所や悪い所を指摘したりされたりして、もう1回考え直すことができた。
・ 自分の構成シートに皆の意見が貼ってあり「ここをこうした方がいい」や「そう思う」と書かれていて、自分の考えが伝わってよかったと思う。

思考の深まりを生徒も実感している様子が、振り返りの記述からも伺える（表5）。

「授業のリアルな環境構成」を取り入れた、第1時、第3時、第5時の振り返りの記述を検証した（表6）。

表6 「授業のリアルな環境構成」の手立てを行った授業の、振り返りの検証（N=117）

	第1時	第3時	第5時
学習活動の反省や感想に関する記述	98%	91%	92%
社会生活に対する考えを深めた記述	20%	46%	84%
次時への目標	22%	21%	20%

「社会生活に対する考えの深まり」に関して記述した生徒が、第1時から第5時にかけて64ポイント増えている。第3者から何度もフィードバックを受けることで、社会生活をより具体的に意識でき、考えが深まり、生徒自身もそのことを実感していると捉えることができる。このように、「授業のリアルな環境構成」は、生徒に社会生活を意識させるだけでなく、互いの思考を深めることにも有効であると考えられる。

② 「教室外の人物」の活用についての検証

本単元は、第5時を「与那原町長による、町づくり計画説明会」と銘打ち、教室外の人物として保護者や「与那原町町づくり課」の方を授業に招いた。単元の学習の流れを確認した1時間目の時点で、生徒たちは「自分の意見を町づくりに取り入れてもらおうぞ」と意気込んでいた。また、第4時「構成表を基に『町づくり計画』を書く」時間では、教室が静まり返り、自分の考えを教室外の人物に伝えようと、生徒たちが書くことに夢中になっている様子をみることができた。

第5時に行った「町づくり計画」を読み合う際は、交流シート（図5）を用いた。文章構成、意見と根拠の整合性など、読み合う視点を示し、「納得バロメーター」と名付け、相互評価が視覚化できるようにし、感想やアドバイスを文章で書き込む欄も作成した。

第5時の振り返りでは「未来の与那原のことを聞くことができていい経験になった」「実際にどのような町づくりが計画されているかを知ることができた」など、教室外人物の参加

表6において、第5時の振り返りに「社会生活への意識を深めた記述」が増えたのも、教室外人物の活用がその要因だと考えられる。このように、教室外人物の活用は、生徒が社会生活を意識しやすく、「書くこと」の生かし方を体現でき、社会生活に生かせる「書く力」の育成に有効であると考えられる。

本単元は5つの言語意識を
表7のように示し、毎時間確認
した。今回の検証では、文章を

書く際特に重要な①～③の意識を持てているか、振り返りの記述で分析を行った（表8）。生徒が最も意識できていたのが①目的意識であった。第1時の「生徒の意見の分析」（表2）で、93%の生徒が社会生活を意識した意見になっていることを踏まえると、多くの生徒が目的意識をもち学習に臨んでいることがわかる。それに対し、②相手意識や③場面意識は台と低く、町民という「相手」や、町長という「状況」を、具体的にイメージできなかったと捉えられる。キャリア形成と関連づけた学習課題を設定し、目的意識をもって文章を書く態度を育成すること、場面意識を工夫させる指導が必要だと考える。

単元の評価規準(表9)を基に生徒作品を分析し、本研究の手立てが「書く力」の育成に有効であったかを検証した。「書くこと」の単元において、文章を書けなかった生徒が、毎単元8名程度いたが、本単元では全生徒が文章を書いた。「書きたい」という意欲をもって学習に取り組んでいると捉えることができ、育成と関連づけた学習課題の有効性を伺える。また、各評価規準項目において、B評価を占めた生徒の割合である。

感想やアドバイス

(買間したいことや参考にしたい書き方、考え方など)

納得バロメーター										観 点
(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	分 かり や す い 書 き 方 で す か
										表 現 は 魅 力 的 で す か
										意 見 と 根 拠 は 合 っ て い ま す か
										根 拠 の 内 容 は 適 切 で す か
										町 づ くり の 意 見 は 納 得 で き ま す か
(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	文 章 構 成 は 整 っ て い ま す か
										町 づ くり の 意 見 は 納 得 で き ま す か
										根 拠 の 内 容 は 適 切 で す か
										意 見 と 根 拠 は 合 っ て い ま す か
										表 現 は 魅 力 的 で す か

感想やアドバイス

(買間したいことや参考にしたい書き方、考え方など)

納得バロメーター										観 点
(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	分 かり や す い 書 き 方 で す か
										表 現 は 魅 力 的 で す か
										意 見 と 根 拠 は 合 っ て い ま す か
										根 拠 の 内 容 は 適 切 で す か
										町 づ くり の 意 見 は 納 得 で き ま す か
(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	(より)	文 章 構 成 は 整 っ て い ま す か
										町 づ くり の 意 見 は 納 得 で き ま す か
										根 拠 の 内 容 は 適 切 で す か
										意 見 と 根 拠 は 合 っ て い ま す か
										表 現 は 魅 力 的 で す か

表7 本単元での「5つの言語意識」

表 8 「言語意識」に関する分析 (N=117)

表9 本単元の評価規準表 10 各評価項目のB評価達成率 (N=117)

知識及び技能(1)オ	96%
知識及び技能(2)ア	95%
Ｂ書くことア	97%
Ｂ書くことイ	89%

受けることで、社会生活を意識した意見へと深化していったと考えられる。

90%に達しなかった「思考力, 判断力, 表現力等 B 書くことイ」は「5つの言語意識」の定着（表8）が弱かった項目と関係しており「5つの言語意識」を継続して授業に活用することが重要だと考えた。

ここで生徒作品の具体例として3作品を紹介する（表11）。

生徒Aは、「東京オリンピックの開催という社会的事実」や「アンケート結果という身近な声」と、意見に合わせて根拠を変えるという工夫が見られる。

生徒Bは、自然災害への備えの甘さを指摘し、ハザードマップの設置場所や数、避難経路を根拠に挙げている。課題の捉え方や根拠の内容が社会生活を意識し、整合性も良い。

「具体的な取り組みは2つです」や「このように」という言葉の使い方、結論部分の書き表し方から、相手を意識し、分かりやすい構成になるよう工夫していることも伺える。

生徒Cは、普段の授業において、文章を書き上げることが難しく、手立てが必要な生徒であるが、本単元では最後まで書き上げた。意見の根拠として自分の体験を用いたり、双括型の構成を用いたり、目標を意識していることが伺え、学びに向かう態度を育成することができたと捉えられる。

本単元では、他の教科で学んだことを活用する生徒もいた。「与那原町独自の法律を作る」という意見の生徒が「地域で法律は作れない」という指摘を受け、社会科の授業で学んだ「条例」を取り入れていた。「ポイ捨て防止を呼びかけるポスター」を、美術で学んだことを生かして説明したり、理科で学んだ知識をヒントに「海上に漂う海藻を取り除く方法」を調べ具体例として使用していたり、教科横断的な学びも見られ、本研究の可能性を感じることができた。

(5) アンケートからの検証

事前事後のアンケートを比較すると、生徒の意識や態度の変容が伺える。「社会生活に授業で学んだ書く力を生かそうと思ったか」という問いに「思う」「まあまあ思う」を合わせた回答が59%から87%に増加し「学んだことを社会生活に生かそうとする態度」の育成に有効であることが伺える（図6）。

「文章を書くことは好きですか」という問いでは「好き」「まあまあ好き」を合わせた回答

表11 生徒作品（一部抜粋）

生徒A
私たち与那原町は、観光客があまりいません。しかし、東京オリンピックなどが開催されると、観光客が増えるかもしれません。アンケートをとったところ、9割の生徒が観光スポットになる大型の店が少ないと答えました。
生徒B
私たち与那原町は、海拔5M以下の低い地域がたくさんあります。しかし、私は自然災害に備えたハザードマップを国道や中道で見かけることがありません。与那原町のハザードマップを調べたところ学校などの建築物を除いて7か所にしか置かれていません。さらに、避難時に国道を横断しなければなりません。そこで、町長である私が計画したのは「これからの自然災害に備えられる与那原町計画」です。その具体的な取り組みは2つです。（中略） このように、町民の意識や周りの環境を整えるような取り組みをすることで、自然災害にも備えられる与那原町ができるのです。私たちの町を私たちの命を守っていただける町にしましょう。
生徒C
私たち与那原町はゴミが増えてきています。表通りは少ないですが、裏通りにいっぱい落ちています。だから僕は、ゴミの少ない町にしたいです。そのためにはボランティアでゴミ拾いやポイ捨てをしないよう心がけるポスターを貼ることです。また、ゴミ箱を設置することです。皆の手で与那原町をゴミの少ないきれいな街にしましょう。

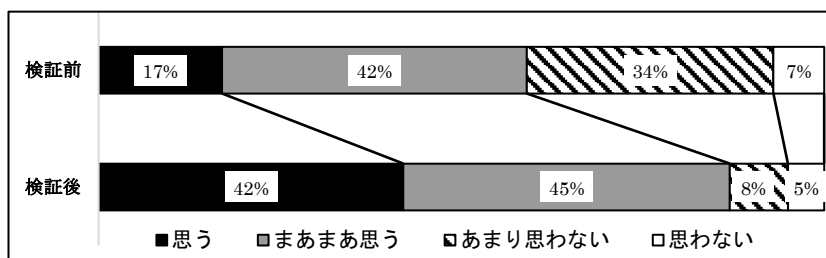


図6 授業で学んだ力を社会生活に生かそうと思ったか (N=117)

が12ポイント増加したものの、55%の生徒が「書くこと」に未だ抵抗感を示していた（図7）。

そこで、「好きではない」と回答した生徒の「単元終了後の感想」を検証した。すると、「書くこと」に対して前向きになっている生徒が93%いることが分かった（表12）。書くことに抵抗感や困難さを感じつつも、社会生活を意識して考えることに楽しさを感じ、「書きたい」「書けるようになりたい」という意欲の高まりが伺える。本単元の手立てが苦手意識を軽減し、それが「書くこと」に対する前向きな感想に反映したと考えられる。

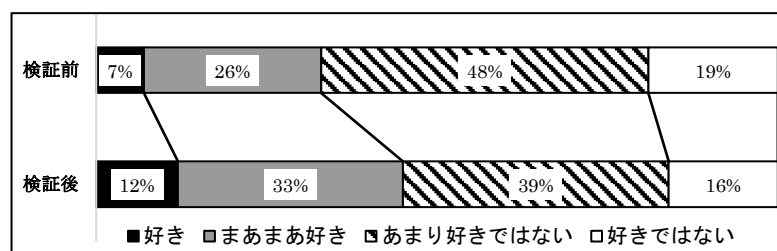


図7 書くことは好きですか (N=117)

表12 「書くことが好きではない」と回答した生徒の単元終了後の感想 (n=65)

前向きな感想 93%	町の将来を考えた楽しい授業だった	55%
	もっといい文章を書いてみたい	29%
	将来役に立つ授業だった	5%
	書くのが楽しくなってきた	4%
	難しかった	7%

(6) 単元全体を通しての検証

単元を通して生徒のつまずきが見られた学習活動が、第2時「根拠を様々な方法で集める」である。授業中、生徒から「どんなことを調べたらいいのかわからない」という声が多くあった。振り返りで「インターネットでは材料が集められなかったけど、友達のアドバイスでアンケートに切り替えたらいっぱい集まった」という記述もあったことから、生徒のつまずきの原因は、調べる方法ではなく、「意見の根拠としてどういう内容の情報を集めるのか」がわかっていない点にあると感じた。今後の課題として、意見と根拠の関係を理解し、適切な情報を予測・収集・整理する情報収集能力の育成を行う必要があると考えられる。

交流した際のコメントからも課題が伺えた。「いいと思う」「納得できる」といった、一言しか書けない生徒がおり、「どこが良かったのか」「どこが納得できたのか」友達の文章から引用するよう指示したが、具体的に引用することができなかった。友達が書いた文章を、目的に応じて読み取れていないと考えられる。目的に応じ、視点をもって文章を読み、内容を理解する「読む力」の育成も行う必要があると感じた。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) キャリア形成と関連づけた学習課題の設定や、「授業のリアルな環境構成」を行うことで、生徒は「書くこと」の必要性を感じ、意欲をもって取り組み、社会生活へ生かせる書く力を身につけた。さらに、授業と社会生活や教科間の学びのつながりにも気づき、学んだことを社会生活で生かそうとする態度を身につけることができた。
- (2) 「5つの言語意識」を提示することで、生徒は書く目的や相手を具体的に意識でき、学びに向かう態度や、社会生活へ生かせる書く力を育成することができた。

2 課題

- (1) 意見と根拠の関係を理解し、適切な情報を予測・収集・整理する情報収集能力の育成。
- (2) 目的に応じた視点をもって文章を捉え、内容を理解する「読む力」の育成。
- (3) 「授業と社会生活のつながり」「教科間の学びのつながり」を、生徒が意識できるような視点に立った授業づくり及び継続的授業計画。

＜参考文献＞

- 文部科学省 2018 『中学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 国語編』 東洋館出版社
- 時事通信出版局編 2017 『平成 29 年 3 月告示 中学校学習指導要領完全対応 授業が変わる！新学習指導要領ハンドブック 中学校国語編』 時事通信出版局
- 菊池真樹子・原徳兆 2016 『すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング中学国語』 学陽書房
- 鈴木一史 2015 『中学校国語科授業を変える課題揭示と発問の工夫 39』 明治図書
- 富山・杉本編 2015 『中学校国語科 単元を通して課題解決をめざす言語活動 プラン 15』 東洋館出版社
- 水戸部・浮田・細川編 2015 『シリーズ国語授業づくり 単元を貫く学習課題と言語活動ー課題を解決する過程を重視した授業づくりー』 東洋館出版社
- 山森・鈴木編 2011 『〔平成 24 年版〕観点別学習状況の評価規準と判定基準〔中学校国語〕』 図書文化社
- 岩間正則編 2008 『文科省全国学力調査 中学校国語 B 問題を授業するー「活用」の力とはなにかー』 明治図書
- 下田・長谷川・有馬監 2008 『活用力を育てる国語授業 中学校編 P I S A 型読解力を育成する授業実践集』 日本標準
- 西村佐二 2007 『国語の活用力を育てる授業』 光文書院
- 小森茂 1999 『オピニオン叢書 55 「伝え合う力」の育成』 明治図書
- 平野彥 1972 『作文指導と学級づくりー作文日本ーが生まれるまでー』 明治図書

＜参考URL＞

- 文部科学省 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）【概要】2016年12月21日
- http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_1.pdf
(2018年 9 月最終アクセス)
- 田中宏幸 2012 「平野彦の作文指導の特色と意義ー日記指導を中心にー」『中西一弘先生傘寿記念論集』
- <https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/3/35885/20141016210623734544/NKNSsanju1.pdf>
(2018年 9 月最終アクセス)